

都市における日常生活の分析視点と課題
(1981年度大会特別研究発表
ー報告・討論の要旨および座長の所見ー)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kamiya, Hiroo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9781

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1991年度大会特別研究発表

—報告・討論の要旨および座長の所見—

神谷 浩夫：都市における日常生活の分析視点と課題

鈴木 富志郎

(1) 報告の内容 報告者は、現代都市社会において、“生活の構造がどのように組み立てられているのかという課題……”に対して、地理学からの貢献ないしはその可能性を明らかにすることを目的とし、日常生活における“時間”の概念の導入を試みているが、今回の発表は、日常生活の調査・分析を行う中で直面した問題について、検討を加えようとしたものであった。

都市生活において時間が重要になりつつある原因としては、多くの論者が資本主義生産様式の浸透を主張しているが、報告者はこの論を肯定しながらも、次の諸点を指摘している。すなわち、1)日本の経営が、生産現場において一層厳密な同時化と同所化を促している 2)これまでもいわれていた職住分離だけでなく、消費の地域分化、機能分化も進行しつつあり、活動のスケジューリングがきびしくなっている 3)筋肉労働に代わってオフィス労働の比重がたかまるにつれて、女性の労働市場参入が容易となり、性の違いによる時間の持つ意味が異なってきた 4)現代社会にあっては、公的部門のサービス供給が拡大しつつあるが、そこにもとめられるものは、時間的空間的な配分の平等性であり、これが時間への関心をたかめている、の4点である。

これらを念頭においた調査の実施については、一般的な技術上の注意事項——層別サンプリングのあり方、母集団の特性、調査期間の同期性、対象者の量の問題などに加えて、回答者の選びかたの問題をあげている。つまり、この種の調査では回答者にかかる負担が大きくなる傾向があるので、回答拒否や不正確回答がでやすく、サンプルの代表度の吟味の検討が重要としている。また、ライフサイクルまたはライフコース概念に基いた場合、分析単位として世帯と個人のいずれが適当であるかは不明としている。

これまでの生活分析が外出行動に限定されていた点については、自宅での活動にかなりの比重がある主婦の時間利用に注目し、図表を資料として配布して説明し、自宅活動と外出行動との関係の重視を提唱した。

選好と制約のいずれを重視すべきかという点については、どのような視点から考えるかによっても異なるとして、ギンタスなどの理論を引用して説明がなされ、社会階層ごとの選択のちがいか、個人の意志に基づくものかは、社会観の違いの反映とみることもできるとの見解も示された。また、時間地理学におけるプロジェクト概念についても明らかでない部分があるとの指摘がなされた。

交通需要や購買行動の分析にあたっては、長期的にみた場合、反復性と多様性が共存していることを、外国文献のデータから引用して紹介された。日常生活を対象とする場合、消費と生産を含む生活行動の全側面をあつかわねばならず、個人と家族、地域社会を結び付ける方法がまだ十分ではないので、地域研究は今後の積み重ねが必要である、との見解を述べている。

報告者は日常行動を定量化することを意図したモデル化の構築を指向しており、それにより生活の全体像を明らかにせんとする課題の解明を望んでいる。(2) 討論 熊谷圭知 [阪南大学] ①時間地理学の分析の中で、活動の質はどのように問題にされるのか。②「男性/女性」という「ジェンダー」による時空間利用の制約の差異の問題は重要な視点ではないと考える。発表者は、現代日本における問題の中でとりわけどんな点を重要と考えるか。③「存在しない選択肢に対して我々は選好を表明できるのか？」という点についての発表者自身の見解はどうか。

[神谷] ①活動の意味は考え始めると際限がない。活動をどのように分類するかは困難な問題で、調査によって分類の仕方がかなり異なる。今のところ社会の中の最大公約数に従うしかないと考える。②ジ

エンダーによる制約の問題は、他の関連する問題に目配りしながら考えていく必要があると考えている。
③短期的で他の条件が一定であるならば、ある程度いえるかもしれない。社会全体の非常に大きな経済体制といったニュアンスが強い場合は、ほとんど選好は不可能であるということになる。

〔小長谷一之（大阪府立大学）〕女性の就業が増加しているといっても、「働かざるを得ない」場合がみられ、「自己実現のため」の場合とは大きな違いがある。経済的制約というかくされた次元にも注意すべきではないだろうか。

〔神谷〕これまで、経済的要因で外へ働きに出るといことは、主婦の補助的労働、つまり内職のような形が多かった。

〔柴 彦威（広島大学・院）〕①都市居住者の生活行動パターンと都市の地域構造との相関について考えると、社会的制約の空間的投影としての都市の地域構造（空間構造）が、制約として考慮に入れられると思うが、従来の研究では、その説明にまではいたっていなかった。これについてどのように考えているか。②生活行動パターンから都市の地域構造とその変容を説明するには生活行動全般の都市全域での研究が必要となる。どのようにして生活行動全般を把握できるのか。

〔神谷〕従来、都市の空間構造という場合、各機能の地域的な分化ということの意味しており、機能あるいはサービスを受ける側の立場からの生活行動の視点とからみあわせてみる必要がある。それを居住、就業、消費など個別の機能の側面ごとにみていけば、少しは都市構造の変貌というところまで研究できるのではないか。

〔伊藤喜栄（神奈川大学）〕①「家事が市場サービスで代替されている」という場合、たとえばお手伝いさんといった家事代替労働の民間供給を含んでいるのか。また、含んでいるとすれば、それらに対する供給体制が国によって異なるか。②レジュメにのべられている「相互に手を携えて行く必要がある」という場合の、「手を携えて」ということの内容は何か。③「日常生活の全体像に関する正しい理解」という場合の、「正しい理解」とは具体的にどのような状況が想定されているのか。

〔神谷〕①お手伝いさんも入れて考えている。②、③買物を例にすると、単純に財の購入とは考えられず、他の余暇的な目的もある。それがモデル化につながるかどうかはわからないが、少なくとも、ノイズの部分、余分な部分がこれだけあるのだということ、いえるようになるのではないか。

〔小森星児（神戸商科大学）〕日常生活という、非合理的なもの、あるいは質的に異なり単純に集計できないものの全体像を、生活行動の実証的分析を通して把握することは可能か。とくに時間という限られた資源の配分を、消費者がいかなる原理で決定しているかについて知る必要がある。

〔神谷〕近経のミクロ経済学では、時間配分と労働時間というものを合理的な資源配分として考えようとしている。発表者としても、個人の生活、世帯の生活というものは、基本的な概念的な考え方としては、合理的なものを満たしていると考えている。ただし、それが必ずしも最適であるという考え方には従っていない。

〔生田真人（大阪市立大学）〕日常生活の行動分析が都市地域分析の中で市民権を得るためには、モデル指向の研究、つまり実務への応用という点と、日常生活の全体像の把握という点との関係を、うまく系統的に整理していくことが基本的に重要とおもわれる。その際に、日常生活の分析視点の中で、その研究目的を「日常生活の全体像に関する正しい理解」のみに限定してよいものだろうか。

〔神谷〕スウェーデンの社会政策において、時間地理学は選択肢が保障されていないという点に対して、全ての人に対して、複数の選択肢を保障するということが社会政策の基本であるという問題提起をした。ただ、ここで発表者自身の答えは用意していない。

〔坂本英夫（奈良大学）〕《意見と感想》この研究は時間地理学の中の前段階の問題を取り扱ったものと判断する。限られた時間を、各個人が、自己の主観下では適正配分しているとはいえ、発表の内容を聞く限り、時間地理学・行動科学・家政学の範囲に関心が集中されていて、時間と空間との関係が不明瞭である。基礎的な概念やモデルが整理されていなければ、空間への取り扱いも容易ではないだろうが、この方向への顧慮を一層希望したい。

(3) 座長の所見 地理学は、1960年代のいわゆる計量革命以降、人文主義地理学、ラジカル地理学など、多くの新しい“地理学”を開発して来た。今回、報告された時間地理学も新しい概念を導入しようとした試みであっただけに、若干理解されにくい面があったように感ぜられた。それは「研究発表要旨」には、発表時には“具体的事例を交えて考察を進める”とされているにもかかわらず、抽象化された発表が主になり、報告者自身の調査による実証的な事例の具体的な開示がなかったことにも、その一因であろう。報告者は“明瞭な定義なしに「居住者」という呼び方……”を使うことに対して注意をうながしているが、同様に、新しい分野での研究だけに、用語については厳密な、そして一般に理解される定義づけが必要だったのではないかと思われる。たとえば、「研究発表要旨」の中に出てくるポリティカルエコノミー、プロジェクト概念、アクティビティアプローチなどは、語一つ一つはわかるにしても、それが特定の意味をもっているとなれば、少なくとも発表にあたっての定義づけは必要だったのではないかと思う。

また、時間地理学にとって重要な調査対象であるべきはずの、個人と世帯のいずれを分析単位とすべきか、選好と選択肢とのかね合い、自宅活動に対する調査方法や分析方法の開発などについて、報告者の十分な意見表明がなかったのも残念であった。

ところで、地理学が他の科学と異なる最大の特徴は、地理学が地域あるいは空間的ひろがりを追及することを本質としている点にあると考えられる。報告者は「研究発表要旨」の中ではこの点にふれているものの、発表にあたっては地域(性)については全く述べられなかった。これが何人かからの質問・意見発言となってあらわれたのであろう。もう一言を加させてもらうと、生活構造(そして都市地域構造)の解明にあたって地理学からの貢献というならば、“時間”という尺度が、空間構造をあつかう地理学にどのようになじむのかについての吟味が必要なのではないかと思う。

新しい概念を導入して、活動の定量化によるモデリングとそこからの全体像の把握という意図は壮とするが、今回の発表は研究の方向性を示唆した中間

報告の段階にあったといえそうである。